



# 央州寺通信 十月号



菅原祐執 [ysobtportland06012017@oregonbuddhisttemple.com](mailto:ysobtportland06012017@oregonbuddhisttemple.com)

## 「親鸞聖人の晩年」

浄土真宗の教義の話となると、親鸞聖人の主著である『顕浄土真実教行証文類』（『教行信証』、『教行証文類』などと略）やその他のお聖教（しょうぎょう）をどのように読むべきか、どのように受け取るべきかという話となり、本願寺派の中では大体の定まった教義というものがあるわけですが、親鸞聖人の生涯の話となるとこれといって確定している事実も多くはないので割と自由に妄想出来る部分でもあります。

といいますのも、親鸞聖人はご自身の話をほとんど書いて残しておられず、比叡山を降りられて法然聖人のお弟子となられたこと、法然聖人の主著であり、限られた門弟にしか書写を許されなかった『選択本願念仏集』の書写を許され、法然聖人にサインをもらったこと、また法然聖人の御真影（ごしんねい。ポートレイトのこと）を作ることを許されたこと、そして越後へと念仏弾圧の影響で流罪となったということが『教行証文類』の「化身土文類（けしんどもんるい）」末の後序に示されているくらいです。比叡山でどのような役割の僧侶でおられたのか、というのは長い間謎でしたが、大正時代に西本願寺の宝物庫で見つかった『恵信尼消息』によって、親鸞聖人は堂僧という修行僧であったことがわかりました。

親鸞聖人は越後への流罪が赦免された後に、関東の有力な豪族に招かれ関東での布教を始めたといわれています。関東におられたのは『親鸞聖人御消息集』などでの関東のご門徒の方々との手紙のやり取りで間違いがないのですが、京都に戻られた正確な年代、理由などはハッキリしていません。どうやら親鸞聖人62, 3歳の頃には京都に戻られたようですが、奥君の恵信尼公は越後へと戻られ聖人のお世話は末娘の覚信尼公がされたといわれています。実際に、『恵信尼消息』では恵信尼公と京都におられた覚信尼公が親鸞聖人の御往生についてのやり取りをされています。

このようなことから親鸞聖人が京都に戻られてから晩年どのようなことをされていたのかは正確なことがわかりません。唯一わかっているのは聖人は80代の後半まで精力的に執筆活動を行われていたということです。

親鸞聖人ご自身の書かれたものを「ご真筆（しんぴつ）」と言いますが、80代後半のご真筆の残っているものに『尊号真像銘文』、『一念多念文意』、『唯信鈔文意』などがあります。これらは聖人の論文であるというよりは、御軸に書かれている御文の意味を註釈された『尊号真像銘文』、また、『一念多念分別事』という法然聖人門下の隆寛律師の著作の註釈書である『一念多念文意』、聖覚法印というこれまた法然聖人のお弟子さんの著作である『唯信鈔』の註釈書である『唯信鈔文意』という著作や御文をかな文字で解説するというような解説書が主なものでありました。

また、「三帖和讃」と呼ばれる『浄土和讃』、『高僧和讃』、『正像末和讃』もまた聖人が七十代後半から八十代後半の作であります。和讃は今様（いまよう）という七五調の和歌の形式を基に浄土真宗の教えをわかりやすく伝えようとしたものであります。これらのことから、『教行証文類』が多くの経論釈を引用し、浄土真宗の教義を示したものであるのに対して、晩年のお聖教はどちらかといえば布教を意識したものであるということが出来ます。

確かに親鸞聖人は私たちの思うような「お寺」というものを持たない方でありましたが、執筆活動や手紙のやり取りをしてその生涯を通じてお念仏の浄土真宗の教義を人々に広く伝えようとした方でありました。しかし、これらの布教を意識されたような著作が主に80代近くになされたということはこういった意

味があるのでしょうか？

これは想像でしかないのですが、親鸞聖人が京都に帰られた後に目と鼻の先に住まいをされていたのが曹洞宗の開祖である道元禅師であるといえます。道元禅師は親鸞聖人が80歳頃に亡くられますが、その頃に関東で禅と念仏を猛烈に批判された方が日蓮上人でした。

諸説ありますが、日蓮上人は辻説法と言って、多くの人を対象に路上での説法をされたと言われていました。親鸞聖人はその噂を聞かされていたでしょうし、念仏の正当性を広く人々に広めるためにも一般の人々にわかりやすい方法での布教を意識されたのかもしれませんが。

何にせよ、聖人は90歳での生涯を閉じられるまで、勉学を続けられ、お念仏のみ教えを広く人々に伝えようとされていました。その姿勢は私もなるべく真似させていただかねばならんと思わされるのであります。

合掌

菅原祐軌

中央寺駐在開教使